

伝統的生態学的知識を再 評価する

テキスト: 大村敬一 カナダ極北地域における知識をめぐる抗争
『紛争の海』より

伝統的漁業管理の再評価

生態学的・人類学的な開発アプローチの提起

生態学的な要因に加え、社会経済的・文化的要因
によって資源利用をめぐる意見は異なる

調査研究の課題

- 1) 水産資源の利用と分配に関する慣習
- 2) 共同で漁場を管理する合意
- 3) 機能させるための制度と組織

中央集権的な漁業管理・開発とは相容れない、
住民参加の論理に依拠

TEKとSEK

「伝統的な生態学的知識」

(Traditional Ecological Knowledge, TEK)

- 文化的な伝達によって世代から世代へと伝えられ、蓄積された知識と信念の総体
- 資源の利用を歴史的に継続するかたちで実践してきた社会の所産

自然, 社会, 超自然を含む形で把握されている環境全体
に関する知識・信念・実践



「科学的な生態学的知識」

(Scientific Ecological Knowledge, SEK)

イヌイトとカナダ政府による 共同資源管理

TEKとSEKとの融合

政府による環境開発・管理の場面にTEKを取り込み、イヌイトを参加させるプログラムが実現 (1980年代以降)



**水産資源, 野生生物などの管理に参加:
共同管理制度**

資源管理, 環境開発計画, 環境アセスなどの調査, 分析, 政策決定の過程に, イヌイトが対等の資格で参加することを保証。近代科学とTEKが対等な資格で協力

シロイルカ漁の共同管理

カナダ政府 イヌイトとの連携で管理

総漁獲量の決定 (Total Allowable Catch)



参加村落への割当

漁についての取り決め

漁の共同合意

肉の分配をめぐる社会関係

肉の共同消費

イヌイトのTEK

- 先住民の知識と信念と実践の総合的多岐系として定義 (Berker, etc.), 「**具体の科学**」
- 自然環境, 社会や超自然を含むかたちで先住民に把握されている環境全体
長年にわたって環境との相互作業を通して先住民が鍛え上げてきた知識と信念の統合的体系の総称 P.151
- 「近代科学と対等な世界理解」という評価

一元的世界観

- 自然と人間とを切り離さずに一体的な全体としてとらえる

欧米近代の自然観

「自然対人間」という二元論ではない

「イヌア」を軸に展開される知識の再評価
(精霊)

「イヌア」(隠喩としての)

- 自己の周囲に観察されるさまざまな減少を正確に把握するための道具 P.152

さまざまな種類のイヌアたちが、同種ごとに形成するさまざまな種社会を基礎的な社会的単位に、-----関係を結んでいる巨大な社会空間

具体的事例 P.153

(自然の諸現象, 動植物の動きを正確に把握)

開発のなかの対立

- ・ イヌイト 環境管理や環境開発の過程に主体的に参加する権利を主張

政策決定のあり方, 近代科学の一極支配に対して修正を求める

社会 イヌイトなど無節操な乱獲者であるとみなす偏見

TEK イヌイトの生業活動が, 環境管理の面でも優れた能力をもっていることを指摘
応用することを提唱

P. 155

共同管理制度への歩み

- **いかにTEKを活用すべきか？**

カリブーの狩猟をめぐる対立 P.157

サケ漁管理でユーピックが排除

近代科学の基準にしたがった会議 (述語, 話法, 論理)

TEKの基準は採用されない



**サケの減少を移動ルートが変わったこと
によって説明 (受入れられず)**

TEKとSEKの相違

- SEK 「戦略」のイデオロギー

環境を人間との関係から切り離して対象化, その環境にみられる現実の多様性を一般化したり, 定量化することによって, 客観的な知識を構築。全体を把握しようとする P. 161

一般化や法則化など, 環境に関する情報の操作

- 定量的, 合理的, 没力ち的, 知識の形成が早く, 結論にはやくいたる, etc.

TEKとSEKの相違

- TEK 「戦術」のイデオロギー

環境との密接な関係に巻き込まれながら、その中に一瞬あらわれる機会をつかみ、その機会を利用して「その場しのぎ」的に「うまくやる」機略のこと。 P.161

- 柔軟で経験的な性格，具体的な内容に即した対処法を知っていること，知識の形成には時間がかかる，主観的，etc.
- 環境は対象化して操作，管理することができる資源とみなされていない
無数の対処方法を知っていることに価値をみいだす

TEKとSEKの相違

- TEK 対象化された環境を資源として開発しようとする
人間との関係から切り離され, 利用, 管理
- SEK コンテキストごとに異なる無数の対処法を経験の蓄積として開発しようとする
生業活動の実践を積み重ねることによって環境との関係を密にし, 多様な経験を記憶の蓄積として開発することに関心

経験の物語を編み出し, 自身の記憶を開発してゆく

P.162

方向性

- TEK, SEKを統合するのは不可能？
- どのような状況でどちらを優先させるか, 二つをバランスよく共存させるか？
- 状況にあわせて使い分けるために必要な意志決定のシステムとは, どのようなものか？

演習問題

- 1) TEKにもとづいて政府とイヌイトが共同で資源管理しているカナダのシロイルカ、サケの事例をしらべてみよう。
- 2) SEKとTEKはどのような共存関係にあるべきか。テキストの内容にもとづきながら、自説を展開しなさい。